今は（係助）昔、小野篁と（格助）いふ（四段・体）人おはし（サ変・用）（Ⓢ作者→篁）けり（過去「けり」終）。嵯峨の帝の（格助）御時に（格助）（おおんとき）、内裏に（格助）（だいり）

今となっては昔のことだが、小野篁という人がいらっしゃった。嵯峨天皇の御代に、内裏（宮中）に

札を（格助）立てたり（下二・用　完了「たり」用）けるに（過去「けり」体　接助）、「無悪善」と（格助）書きたり（四段・用　存続「たり」用）けり（過去「けり」終）。帝、篁に（格助）、「読め。」（四段・命）

（誰かが）札を立てたのだが、（そこには）「無悪善」と書いていた。帝は、篁に、「読め。」

と（格助）仰せられたりければ（下二・未　尊敬「らる」用　完了「たり」用　過去「けり」已　接助）（Ⓢ作者→嵯峨天皇）、「読みは（係助）読み（四段・用）候ひ（補四段・用）な（意思「む」終　強意「ぬ」未）む。されど、（接続詞）

とおっしゃったので、「読むことは読みましょう。しかし、

恐れにて（断定「なり」用　接助）候へば（補四段・已　Ⓣ）、え（副詞）申し（四段・用）候はじ。」と（格助）奏しければ（サ変・用　過去「けり」已　Ⓚ篁→嵯峨天皇）、「ただ

恐れ多いことでございますので、申し上げることはできません。」と申し上げた（奏上した）ところ、「とにかく

申せ。」と（格助）たびたび（副詞）仰せられければ（下二・未　尊敬「らる」用　接助）、「『さがなくてよからむ』と（格助）

（Ⓚ自敬表現　嵯峨天皇→嵯峨天皇　Ⓢ作者→嵯峨天皇　過去「けり」已）

申せ。」と何度もおっしゃったので、「『さがなくてよからむ』（嵯峨天皇がいなくて世の中が良くなるだろう）」と

申し（四段・用）て（接助）候ふ（補四段・体　Ⓣ　終助）ぞ。されば、（接続詞）君を（格助）呪ひ（四段・用）参らせ（補下二・用　Ⓚ篁→嵯峨天皇）て（接助）候ふ（補四段・体　Ⓣ　断定「なり」終）なり。」と（格助）

申し上げてございます。ですから、君（帝）を呪い申し上げているのです。」と

申し（四段・用）けれ（過去「けり」已）ば（接助）、「これは（係助）、おのれ放ち（四段・用）ては（係助）、誰か（係助）書かむ（四段・未　推量「む」体（結））。」と（格助）

（Ⓚ作者→嵯峨天皇）

申し上げたところ、「これは、（読むことが出来る）おまえを除いては誰が書くというのだろうか。（おまえ以外には書くはずがない。）」と

仰せられければ（下二・未　尊敬「らる」用　過去「けり」已　接助）、「されば（接続詞）こそ（係助）、申し（四段・用）候はじと（補四段・未　格助）は（係助）申し（四段・用）て（接助）

（Ⓢ作者→嵯峨天皇　Ⓚ篁→嵯峨天皇　Ⓣ　打消意思「じ」終　Ⓚ篁→嵯峨天皇）

おっしゃったので、「ですから、申し上げませんと申したので

候ひつれ。」（補四段・用　Ⓣ　完了「つ」已（結））

ございます。」

おはす…いらっしゃる
おいでになる
（「あり」の尊敬語）

仰す…おっしゃる
（「言う」の尊敬語）

候ふ…です・ます・ございます
（「あり」の丁寧語）

お仕えする・おそばに控える
（「仕ふ」「あり」の謙譲語）

されど…けれども

え～（打消）…～できない

申す…申し上げる
（「言う」の謙譲語）

奏す…（天皇・上皇・法皇に）
申し上げる・奏上する

たびたび…何度も

されば…そうであるから
それゆえ

参らす…（お）～し申し上げる
（謙譲の補助動詞）
差し上げる・奉る
（「与ふ」「やる」の謙譲語）

放つ…除く（差し置く）
手放す・自由にする
開ける・見捨てる
射る　など

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/